

近代仏教会館の設立と展開

中西直樹

はじめに

近代に入ると、寺檀関係を前提としてきた伝統的な布教活動にも変化が生じはじめた。とりわけ都市部では、累代の門信徒以外の都市労働者・住民を対象とする「特殊布教」⁽¹⁾が展開されるようになり、こうした状況に対応した布教施設として「仏教会館」が建設されるようになった。

仏教会館に明確な定義はないが、従来の寺院建築とは一線を画し、畳敷きではなく椅子席を基本とし、各種会合・行事にも対応可能な構造を備え、外観が洋館風の場合も多かった。しかし、その設立状況とそこでの布教実態に関しては不明なことが多い。

本稿では、代表的な仏教会館の設立経緯や、そこでの布教実態の検証を通じて、近代における仏教布教の変化に及ぼした歴史的意義について論じてみたい。

1、明治二〇年代までの先駆的事例

まずは、明治二〇年代までに、東京や名古屋で建設された会館（会堂）の設置状況と、キリスト教の教勢拡大と教会堂建設に対抗しておこった仏教系世論の仏教会堂必要論から見てみよう。なお、明治期までは「会堂」を名称に付す場合が多く、その後、次第に「会館」の用例が多くなり、大正期には「会館」名を付すことが一般化した。

白蓮会堂 都市布教のために建設された施設の早い事例として、島地黙雷（一八三八—一九一一）により、一八八三（明治一六）年三月、東京市麹町区（現東京都千代田区）に建設された「白蓮会堂」がある。白蓮会堂は、七五年に結成された白蓮会の活動拠点として、会員の寄付により建設され、間口五間（約九・一メートル）・奥行六間（約一〇・八メートル）、約三〇坪の平屋建であった。⁽²⁾ 会堂では毎週土曜日に島地の原人論・徒然草、多田賢住の四教儀諦観録などの講義が開かれた。また毎月三日に説教会が開催され、新年会や報恩講、関係者の追悼会なども執行された。⁽³⁾ また、九二年に会堂で行われた藤井宣正と井上瑞江の結婚式は、最初の近代的仏前結婚式であったとされる。⁽⁴⁾ 八年に女子文芸講習会がはじまり、和洋裁・編物・插花・点茶・和歌・英語・算術等が教授された。⁽⁵⁾ 後にこの講習会は、千代田高等女学校（現千代田国際中学校・武蔵野大学附属千代田高等学院）へと発展していった。

浄心館 一八九〇年九月には、同じく麹町区に桑田衡平（一八三六—一九〇五）により、「浄心館」が建設された。⁽⁶⁾ 桑田は、英米の医学書を数多く翻訳し、蘭学塾を開いて後進の指導にあたり、内務省衛生局在職中は全国医術開業試験の問題を立案するなど、日本医学界の発展に大きく貢献した人物である。当時の西洋医師に仏教に強い関心を示す者は多く、桑田はその代表的人物であった。⁽⁷⁾ 浄心館は桑田が私財を投じて新築したもので、毎土曜日に講師を招聘して仏教講演会が開催された。講堂の構造は、間口十間（約一八・二メートル）・奥行六間（約一〇・八メートル）で正面に講壇を設け、講壇より遠い三方の聴講席は少し高く設定され、聴衆一同が講壇を見やすいように工夫されている。

た。九月七日の開館式には、辻新次文部次官、佐々木東洋・河瀬秀治ら有力居士・女性ら三百名ほどが参集したという。⁽⁸⁾

信道会館 一八九一年九月には、大谷派の南条文雄の指導のもと、初代近藤友右衛門（実業家）によって名古屋市に「信道会館」が新築・開館した。当初は「信友説教場」と称していたようである。七間（約一二・六メートル）四方の平屋建対面所風の建物で、翌年一月に教場内に親友会という組織が結成され、同会の主催により南条文雄・吉谷寛寿・小栗栖香頂・江村秀山・村上専精ら大谷派の碩学の説教会が連夜のように開かれた。一九一五（大正一四年）九月に信道会館と改称し、日曜講演・婦人講座・座談会等が開催されるようになった。⁽⁹⁾

当時、強い護法意識を抱く僧俗により、各地で多くの説教所が設置された。⁽¹⁰⁾ そのなかには、会堂や会館を称する場合もあったが、いずれも中小規模のものであり、キリスト教の布教施設に比べると見劣りするものであった。

仏教会堂必要論 一八九一年二月、神田駿河台に正教会の東京復活大聖堂（通称「ニコライ堂」）が竣工した。その威容に仏教者は衝撃を受けたようである。⁽¹¹⁾ 翌年一月発行の『伝道会雑誌』は、前年までに同志社出身の横井時雄により本郷東竹町会堂が、カナダのメソジスト教会派遣のイビーらにより東京本郷に中央会堂（現日本基督教団本郷中央教会）が建設され、布教活動が活発化していることを報告し、仏教側も本格的な教会堂を建設すべきことを主張している。⁽¹²⁾

一八九六年四月『明教新誌』掲載の論説「仏教会堂設立の必要」でも、次のように述べられている。

全国四千万の人心を支配し、所在十万の僧侶を有せる我が仏教は未だ帝都たる東京に於て一の布教会堂を有せざるなり、数百の東都寺院悉く布教会堂に充るを得べしと雖、地、偏せずんば、所、狭く、未だ以て斯の仏教を顕揚し斯の民心を教化するに於て慊焉たるものなくばあらず。⁽¹³⁾

こうした状況のなかで、同年には東京の各宗派の在家信者有志八〇余名が趣意書を發表し、「大日本護法館」という会堂の建設を目指していた。その趣意書には次のように記されていた。

方今条約歩を進み、治外法権を恢復し、内地雜居を視る、それ必ず応に近きに在るべし、これに先つて、外に於ては、教者堂々旗を樹て鼓を鳴らして、以て我邦に侵入し、將に以て我が宗教の版図を蝕食せんとす、故にこれが防虞なかるべからず、又内にしては、北海道台湾及び朝鮮等に、布教せざるべからず、実に内外多事の秋なり、此際仏法者、徒に道俗界の分に拘泥して、袖手傍觀して可ならんや⁽¹⁴⁾

前述の論說「仏教会堂設立の必要」も、この大日本護法館の建設計画にもふれて期待を表明しているが、内地雜居への仏教者側の危機意識は一時的なものに終わり、建設は実現しなかったようである。

二、青年仏教者による会館建設計画

明治二〇年代までの会館（会堂）の設立に宗派の積極的関与を確認することはできない。また、島地黙雷のような例外を除くと、この時期に建設を企図したのは在家信者たちであった。旧来の寺院生活に慣れ親しんだ僧侶の側に、会堂必要性への認識はいまだ希薄であったと考えられる。そして、三〇年代に入ると、新たに青年仏教者を中心として会館（会堂）の建設計画が浮上した。

大日本仏教青年会の建設計画 明治二〇年代初頭の東京では、第一高等中学校・帝国大学（現東京大学）の徳風会、東京専門学校（現早稲田大学）の教友会、慶應義塾（現慶應義塾大学）の三田仏教会など、仏教青年会が次々と設立された。さらに、これら仏教青年会は、連合組織を結成して会堂の建設を表明した。

東京の諸学校の仏教青年会の連合組織は、一八九二（明治二五）年一月に親睦会を開催したことに始まる。その後、同年四月八日に釈尊降誕会を執行し、七月二〇日から八月二日まで夏期講習会を開催した。その活動は、宗派ごとと分断され、寺檀制度を前提としてきた近世仏教以来の旧習との決別を告げる画期的なものであり、仏教改革の旗手として、仏教界で大きな期待が寄せられていた。¹⁵⁾

一八九四年四月に仏教青年会の連合組織は、日本仏教青年会を結成した。その規則では、東京に本部を、各地に支部を置くことを定め、毎年の釈尊降誕会・夏期講習会の開催に加えて、説教・講義・演説会の開催、出版物の発行を活動事項として掲げた。¹⁶⁾翌九五年、大日本仏教青年会と改称され、九八年十二月一〇日に開催された秋季大会では、定例の釈尊降誕会、夏期講習会の開催の件に加えて、会堂建設の推進についても協議し、会堂建設に向けて委員を選定して調査に着手することとなった。¹⁷⁾背景には、九四年五月に開館した神田の東京基督教青年会館に対抗する意図もあったと考えられる。

その後も会堂建築問題は、一九〇一年開催の春季・秋季大会頃まで議論されたが、仏教公認教運動・宗教法案への対応をめぐる大日本仏教青年会内部に対立を生じ、同会の幹事であった近角常観が求道会館の建設計画を発表すると頓挫していった。¹⁸⁾しかし、その後も大日本仏教青年会に会堂の建設を求める意見は根強くあり、一九一四（大正三）年二月に仏青年会館準備相談会が開催されたが、実現には至らなかったようである。¹⁹⁾

新仏教同志会の建設計画 大日本仏教青年会の活動が急速に停滞していったのに代わって、新仏教運動の担い手となったのが、境野黄洋、田中治六、安藤弘、高嶋米峰らによって、一八九三年三月に結成された仏教清徒同志会（一九〇三年新仏教同志会に改称）であった。仏教清徒同志会は、宗派仏教への批判的立場を示すとともに、キリスト教の一派でありながら、正統派キリスト教を批判するユニテリアン協会と密接な関係を有し、当初、仏教清徒同志会の講演会など活動は、ユニテリアン協会の活動拠点である惟一館を借用して行われた。²⁰⁾その後、一九〇三年に機関誌

『新仏教』の創刊六周年を記念して、会堂建設計画を発表し、寄付金募集に着手することとなった。⁽²⁴⁾

高島米峰は、ともすれば杜撰になりがちな宗教家の寄付金集めに不快感を覚えており、寄付金募集に躊躇していたようだが、着手することになった経緯を次のように述べている。

会堂の必要、これはもう、今更らしく申すまでもないことで、正直に白状しますれば、吾が新仏教同志会が産声をあげた時から、今日まで、たゞ一日でも、「会堂が欲しい」の念のなくなつたことはありません。有難いことには、今までは、ユニテリアン協会の好意で以て、定期の公開演説会に、まどつくこともなかつたのでありますが、好意だからつて、そうくいつまでも、厄介になつて居るのは、あまりに虫がよ過ぎると思ひまするし、どうせ一度は、会堂らしいものを建てなくてはならぬのだから、兎も角、この機会を利用してその事を発表しやうではあるまいかといふのが原案で遂に評議員会の決議を見るに至つたのであります。⁽²⁵⁾

機関誌『新仏教』に発表された計画によれば、外観はインド風二階建て、建坪六三坪（二階五四坪）、四八一人収容（一階三三六人・二階一五五人）の計画であり、工費約一万円を見込んでいた。⁽²⁶⁾しかし、寄付金募集は不調に終わり建築には至らなかつたようである。⁽²⁷⁾

仏教青年伝道会会堂 宗派仏教との直接的関係を有さない大日本仏教青年会や新仏教徒同志会が、会堂建設を実現できなかったのに対し、一九一一年六月に会堂建設を実現したのが、一九〇二年一月に各宗派の次世代を担う青年僧侶有志によって、東京浅草に結成された仏教青年伝道会であつた。同年一月六日に浅草伝法院で開催された仏教青年伝道会の發起人会には、天台宗の遠賀亮中・大森亮順・中鉢（壬生）雄舜、真言宗智山派の櫻井栄山、浄土宗の窪川旭丈・大島真厚・清水信順、曹洞宗の来馬琢道、真宗本願寺派の柘植信秀、真宗大谷派の白山謙致・本多文雄・安

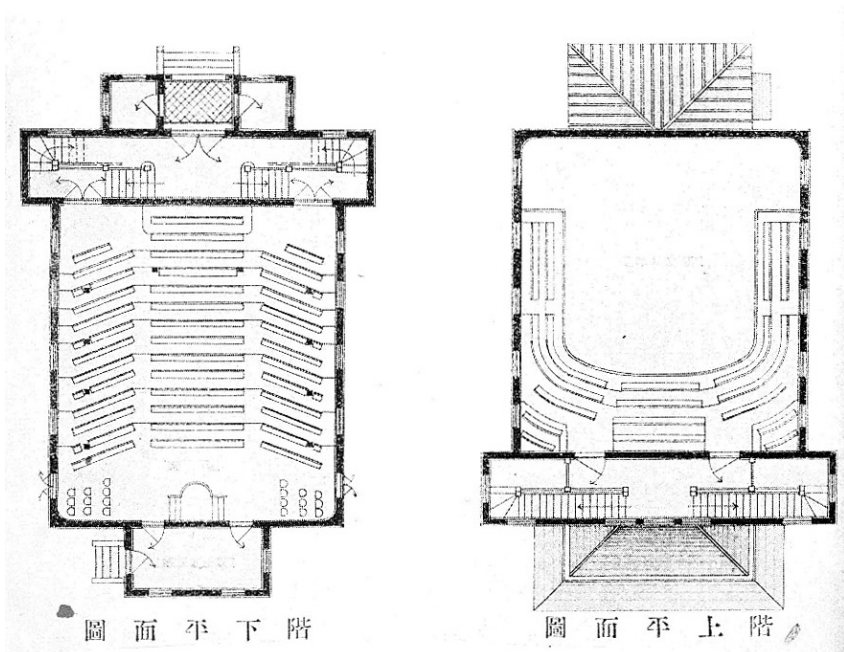
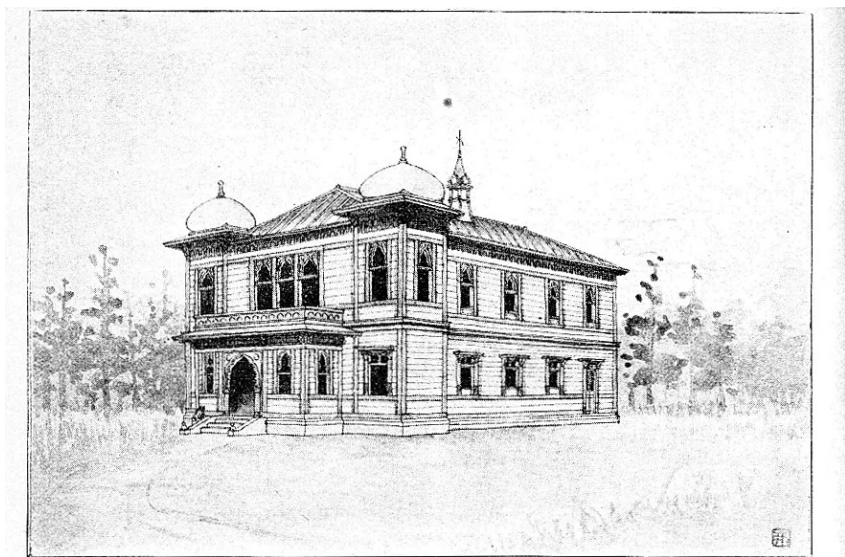


図1 新仏教徒同志会会堂設計図（『新仏教』7巻4号、1906年4月）

藤嶺丸、日蓮宗の中川観秀らが参集した。⁽²⁸⁾

翌○三年一月二五日に第二回發起人会を開き、安藤嶺丸・壬生雄舜・窪川旭丈の三名を常務幹事に選出した。安藤嶺丸は、東京浅草の真宗大谷派蓮窓寺の住職であり、会の実務で中心的役割を果たした。壬生雄舜は東京浅草の天台宗泉蔵院の住職、のちに天台宗総会議員・教学部長などの要職を歴任した。窪川旭丈は、東京浅草の浄土宗龍宝寺の住職で、○七年に宗会議員に選ばれ、その後、教務部長・庶務部長などの宗務要職を歴任した。○七年に会の規則を改正し、五十嵐光龍（真言宗）と来馬琢道（曹洞宗）を常務幹事に加えた。⁽²⁹⁾

東京浅草には各宗派の寺院が集まっており、その住職らのネットワークから会が結成されたのであった。一九○三年四月一日、浅草公園内に一五坪の天幕（テント）を張り、八○日間にわたり第一回天幕伝道を実施し、以後、天幕伝道を主要な事業とした。天幕伝道の実施意図を会の機関誌『青年伝道』は、次のように説明している。

多くの人は言ふ、伝道せんとすれば、巍然たる殿堂のあるあり、何を苦みてか寺院の外に天幕を用ひん、法を屋外に説くが如きは仏法を軽んずるの甚しきものなりと、さらば、其寺院に仏法宣伝の設けありやと問はんに、悲しいかな、徳川幕府の時代より馴らされたる我國民は、寺院を説法の道場として認めんよりは、葬祭の道場として知れる方遙に多く、血の燃ゆる青少年少女は却つて、寺院に近くを厭ふ状となり、寺に詣で、法を問はんとする者は、一二の宗派を除く外、全く無しとも云ふべかりしなり⁽³⁰⁾

天幕伝道は、寺院が葬祭の場となつている状況を嘆き、葬式や年忌忌法要で「家の宗派」として集まる信徒とは別に、新たな信者の獲得を目指してはじめられたものであった。同年九月一日には、仏教青年伝道会の機関月刊誌『青年伝道』が創刊された。当初『青年伝道』掲載の「本会綱領」には、「一、主義 仏教の根本義に依り敢て一宗一派

に偏せず」「二、目的 健全なる信仰を鼓吹し其宣伝を謀る」「一、事業 天幕伝道、唱歌伝道、避暑地伝道、文書伝道、屋内伝道」などと記されていた。⁽³¹⁾ 一九〇五年四月三日には第一回釈迦降誕会を挙行し、以後毎年の恒例行事とし、翌年には事業内容に「仏誕会を国民的祭典たらしむること」が追記され、釈迦降誕会（花まつり）の全国的普及にも大きな影響を与えた。⁽³²⁾

さらに一九〇七年一月に会則を改正して、「将来枢要の各地に会堂を建設すること」「本会の目的に副へる諸種の社会問題を研究し之が実行を努むること」を事業項目に加えた。⁽³³⁾ 同年四月六日より一週間、仏教青年伝道会的首唱により、浅草本願寺で「大日本仏教徒大会」が開催された。宗派当局の直接的な協賛を得た大会ではなかったが、全国の仏教関係者に六千通の案内状を送付し、来会者は約三千八百名に及んだ。⁽³⁴⁾ 大会に開催に併せて、仏教青年伝道会は、会堂建設計画を発表した。その建設趣意書には、その目的を次のように記している。

会堂は、社会の凡ての階級の人々を迎へ入るに便利のため、下駄でも草鞋でも跣足でも自由自在に出入の出来るやうに「コンクリート」の叩きに土間を拵へまして私共が永年の希望でありました理想の会堂を建築したいと思ふので御座います⁽³⁵⁾

従来の寺院建築の閉鎖的な雰囲気を一新して、より開かれた布教の場としたいという意図がうかがえる。用途としては、布教以外にも學術の講演・衛生の演説・教育の幻燈・音楽の演奏などに使用して一般市民の公益にも供し、図書閲覧室を設置して仏教研究に資するようになりたいと記している。同年七月、東京市会が建築予定の浅草公園内の土地を永代無料で使用することを議決し、建築資金の募集活動に着手した。建築事務所の主任理事には安藤嶺丸が就任し、発願人総代に浅草寺主の修多羅亮延・東久世通禧・柳原義光・大内青巒・前田正名が、協賛者に成田山主石川照



図2 青年仏教伝道会会堂(『青年伝道』94号、1911年8月)

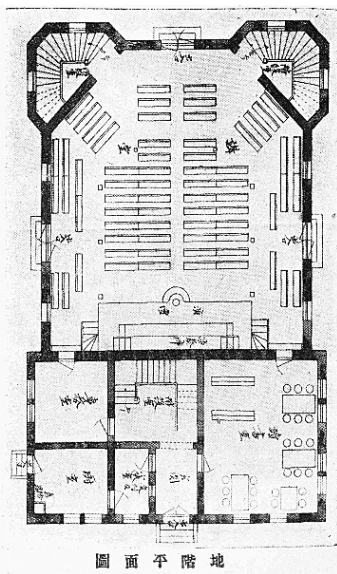
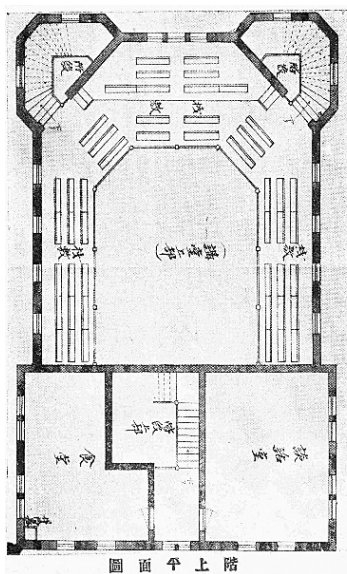


図3 青年仏教伝道会会堂設計図(『青年伝道』45号、1907年4月)



図4 青年仏教伝道会会堂での仏式結婚式
(1939年4月22日、蓮窓寺〔東京都台東区〕所蔵)

勤・洪沢栄一らが名を連ねた。構造は白煉瓦総二階建、建坪六二坪一合、工費三万五千円を見込み、約五百人を収容可能とする建物であった。³⁶⁾

一九一一年六月に会堂が落成し、インドから石造を将来して盛大な開堂式が挙行された。石像が新橋に到着すると、各新聞社の記者を築地の料亭に招いて芸者を侍らせ酒宴を開いた。また、石像歓迎のため浅草の芸妓百数十名が「伝道会」と染めぬいた手拭いを肩にかけ、揃いの日傘で歓迎パレードを挙行了たという。

こうした対応に、仏教界からの批判を招いたものの、仏教青年伝道会堂は、大正期の仏教会館建設ラッシュの先駆的存在となった。³⁷⁾

このほか、東京の本願寺派高輪仏教大学内に一九〇二年九月に設立された万国仏教青年連合会でも、仏教会館を設立する計画があり、翌年七月以降に各地で寄付金募集活動に着手した。しかし、本願寺派の学制更改により、〇四年に高輪仏教大学の廃止方針が決まると、建設計画は頓挫していったようである。³⁸⁾

三、本願寺派臨時布教と会館開設

日露戦争後、軍需産業を中心とする工場労働者の数が急増した大阪では、本願寺派津村別院の関係者により、青年労働者を対象とする特殊布教がはじめられた。さらに一九〇八（明治四一）年以降、本願寺派は都市部を中心に新たな信者層の獲得を目指し、一定期間に布教員を総動員する臨時布教を開始した。臨時布教は、同年四月に京都市全域にはじまり、九月に東京・横浜で実施され、十一月には東海地方以西の各都市部で展開された。翌年以降は鉄道巡回布教がはじまり、工場・商店・警察署・郵便局などでの職域布教も広がりを見せた。³⁹これに連動して本願寺派では、新たな布教拠点として京都・大阪・東京といった都市部で会館が開設されるようになった。

淳風会館・本願寺会館 西本願寺の門前西若松町には、すでに「淳風会館」があった。淳風会館は、一八九六年八月に防火・風致上の問題から本山総門の側にあった総会所の建物を移築し、布教施設として再利用したものであった。

一方、総会所は、学林町の常楽寺本堂に仮移転した後、九八年三月に玉本町に新築・落成している。⁴⁰

さらに一九〇六年七月には、西本願寺通用門内の西側（現龍谷大学大宮図書館付近）に「本願寺会館」が開館した。元梵唄練習所の講堂を修繕したもので、開設の趣旨を本願寺派の機関誌『教海一瀾』は次のように報じている。

本願寺会館の設立たるや、要は本山職員の穩厚親密を旨とし、職員中階級の障壁を設けず、上下一館に会するときは極めて平民的に相接し、所謂手を握りて共に親み、心を一にして共に楽み、喜憂を共にして相進み、率あて一派事務の活動を期せらるゝものと察せらる。⁴¹

当初は、堂班等によって席次が定められた両堂（阿弥陀堂・御影堂）とは異なり、本山職員の対等かつフランクな

交流の場を想定していたようであるが、開館にあたって本山職員以外にも利用を開放することとなり、会員制として発足した。館内には各種娯楽用品を常備し、バーも設けられ、毎月高僧名士を招聘して精神修養講話が開演された。幹事長に梅上尊融（執行）、幹事に木村省吾（執行）ら、評議員に大谷尊寶（執行）らが役員として名を列ね、金山空常・大八木大行・徳力重左衛門ら本山職員が世話係として運営に従事した。⁽⁴²⁾

同年七月二日の開館式には、賛同者約百名が集まり、大谷壽子裏方・大谷尊重執行長の祝詞につづいて、梅上幹事長が式辞で「本館設立ノ主旨タルヤ本願寺内外ノ僧侶紳士ノ社交機関ヲ供シ友誼ヲ厚フシ道念ヲ修養センカ為ニ外ナラス」と述べ、同月九日には、第一回の精神修養講話が開かれた。⁽⁴³⁾

大阪仏教青年会館 一九〇七年一〇月四日には、津村別院内に「大阪仏教青年会館」が完成し盛大な開館式が挙行された。大阪仏教青年会は、次世代の大阪の経済界をになう資産家の子弟を対象として前年一〇月に設立された。ただちに会員数が約六百人に達し、第三日曜日に集会を開催していた。⁽⁴⁴⁾ 会館は別院の備後町門正面に位置し、人目を引く洋館であったという。開館式に際して、鏡如法主（大谷光瑞）は「夫レ青年血氣未タ定ラサル最モ思想ノ安困ヲ欠ク、或ハ懷疑ニ陥リ或ハ放縱ニ流レ害毒ヲ社会ニ及スニ至ル、是レ蓋シ鞏固ノ信念無キノ弊ニシテ之ヲ救フノ道唯一ニ宗教アルノミ」との親示を寄せた。⁽⁴⁵⁾

明治会館 一九一〇年二月には、東京に「明治会館」が開館した。これより先、〇六年三月、東京在住の本願寺派関係者八〇名が創立発起人となり、仏教会堂創立事務所が築地本願寺内に開設、「仏教会堂建築趣意書」を発表した。その趣意書では日露戦争での勝利を受けて、「世界の一等国に恥ざる様」「日本宗教の一大発展」を期することを目的に掲げていた。また「建築方法の概要」として次のような項目を挙げていた。

一、仏教会堂の建築は公共の事業なれば、多数の人の賛助を得て、成るべく多数の有志より、寄付金を求め、出

来得る丈、完全の建築を為さんと欲す。

一、金三万円を募集し、其中、金一万円にて地所を買入、金一万円にて先づ一千人を容るべき建物を築造し、金一万円を其維持資金に充つる事とす。

(中略)

一、場所は東京市の中央にて、交通に便なる適當の地を選び、靴のまゝ、出入を為し得る洋風の建築とす。

一、毎土曜日の午後と日曜日には、必ず仏教の講演を開き、知名の士を招し、専ら青年男女に宗教の信念、修養の必要を説を、其目的とす。

(中略)

一、本会堂は時間の許す限り、音楽会、其他諸種の集會に使用し、又は実用の学校、夜学等に供し。會員には其使用に就て特別の優待便宜の法を設く。(以下略)⁽⁴⁶⁾

計画では、仏教講演以外にも多目的使用を想定し、一千人収容可能な壮大なものであった。同年一二月に寄付金は三千円に達し、本願寺も三千円の補助金交付を決定したが、なかなか建設には至らなかった。結局、一九〇八年「龍谷會」が組織されたことで、ようやく開設に向けて動き出した。龍谷會は、東京在住の本願寺派関係者が、相互の親睦と信念修養を図り、宗派の面目を発揮するための統一団体として結成されたもので、同年五月一七日に築地本願寺において発會式を挙げた。會長には大谷尊由が就任し、事業項目として、東京市中に三か所の教会を設立して布教を行うこと、立宗記念日に大会の举行、東京在住の学生のための寄宿舎設置、會堂建設、各地での出張講演会や春秋二回の学生大会の開催を掲げた。⁽⁴⁸⁾

一九〇九年一二月、神田区猿樂町二〇番地の四六三坪の地所と家屋を三万三千円で購入し、翌年二月一五日に龍谷

会を同所に開き、明治会館と命名した。会館では日曜講演、真宗法話、少年会などが開催され、青年教化の補助事業として付属英語学校を設けたが、一九一三（大正二）年二月二〇日の神田大火により焼失した。⁽⁴⁹⁾

豊橋会館 本願寺派では、一九一〇年四月に愛知県豊橋市に「豊橋会館」が開館した。豊橋駐在布教使渡邊雷乗が都市布教の拠点として開設したもので、毎月、日曜学校を開き、初回には児童約三百名、付添人四〇名、来賓六〇余名が参集した。鉄道従業者を対象とする精神講話も月二回開催され、沿線の駅員が駅長や助役の引率により来館した。一三年四月一五日午後二時より明治天皇奉悼会を修し、第十五師団将校と婦人、官吏、市内学校長三百余名が参拝し、同日夜と翌一六日昼夜には親鸞六百五十回遠忌を謹修した。このとき、会館所屬門徒が五〇余戸に達し、翌一四年六月、新たに市内に土地・家屋を取得して改修を加え「豊橋教院」に改めた。⁽⁵⁰⁾ 豊橋会館は「会館」を称していたが、布教所に類する小規模なものであり、こうした事例は他にもあったと考えられる。

崇徳会館（崇徳教社本社） 崇徳教社は、安芸地方の僧俗有志が興学・布教・慈善の事業の促進を目的として一八八一年九月に結成された。当初「進徳教社」と称し、社員総数が五六万人を超える巨大結社であった。八三年、明如法主（大谷光尊）より「崇徳」の称号を授与されて社名を改めた。一九〇九年一二月に広島市立町の土地・建物を購入し、翌年四月に本社事務所を移した。一一年八月に新築工事に着手し、一三（大正二）年に落成して九月一三日に盛大な開館式を挙行した。建物は「崇徳会館」と通称され、鏡如法主（大谷光瑞）の好みにより和洋折衷の二階建、二万円以上の経費をかけ、二階には一千人収容可能な大広間があり、一階には事務室・貴賓室・応接室・湯茶場・小使室などがあった。崇徳教社・崇徳中学校（現崇徳高等学校）の諸行事に利用されたほか、講演会や演技会などの各種文化事業に提供され、地域の公会堂的役割も果たした。⁽⁵²⁾

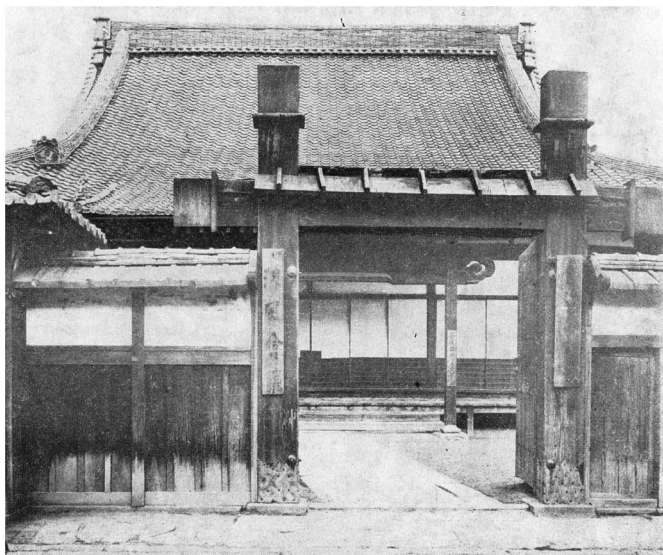


図5 淳風会館（『本派本願寺真宗写真宝典』1916年）



図6 崇徳会館（学校法人崇徳学園提供）

四、各種教化団体の会館

明治末には、本願寺派が特殊布教の活動拠点として仏教会館を設置したのと前後して、仏教系の各種教化団体により会館が開設されるようになった。特に注目されるのは、在家信者により開設された上宮教会会堂と、日露戦争後に高まりを見せた女性教化団体設立の会館であろう。

上宮教会会堂 一九〇七（明治四〇）年四月、東京本郷弓町に「上宮教会会堂」が開堂式を挙げた。上宮教会は、一八九七年四月、河瀬秀治、大内青巒、島田蕃根、桑田衡平ら在家の仏教信者により、東京神田に組織された。設立の中心となった河瀬は、群馬県令・内務省役人などを経て、当時は富士製紙会社の社長であった。河瀬は、明治維新以降の物質文明の急激な進歩にともない、人心が荒廃し思想界が紊乱しているのを憂えていた。そこで、日本文化・思想の礎を築いた聖徳太子の偉業を顕彰し、仏教によってこれを救済したいと考えて同会を設立した。⁵³

発足以来、東京各地で毎月仏教講演会を開催し、講師には、村上專精、島地黙雷、土宜法龍ら各宗僧侶も多数参加した。また、一八九八年二月に機関誌『御国の光』を創刊し、十七条憲法を国会議員らに配布するなど、文書布教活動も活発に行った。一九〇三年、講演会事業を発展させ、上宮学院を開設し、常設の仏教講座を開いた。〇七年にドイツ復活教会の壹岐坂会堂を譲渡され、上宮教会会堂とし、学院を移して社団法人に組織変更した。⁵⁴

六角会館 一九一一年六月には、京都婦人慈善教会が、西本願寺布教会の協力を得て、六角通烏丸東入南側に活動の拠点として「六角会館」を建設した。

京都婦人慈善教会は、一八九四年五月、浄土宗信徒福田もと子の主唱により、烏丸松原下ル因幡薬師堂において創立發起人会を開き、翌月、浄土真宗本願寺派の明如法主婦人の大谷枝子（一八五八—一九三一）を会長に迎えて発足した。発起人には、島地黙雷、赤松連城、渥美契縁などの真宗僧侶ほか、竹村藤兵衛（初代下京区長、衆議院議員）、

池田清助（池田合名会社社長）、飯田新七（高島屋当主）ら京都の政財界の有力者が名を連ねた。⁽⁵⁵⁾

当初は、真宗僧侶を招いて法話を聴聞することが主たる活動であったが、一八九九年に社団法人としての認可を受けたところから、活発な慈善活動を展開しはじめた。一九〇〇年以降、貧困者への白米施与を度々行い、翌年からは、毎年のように慈善市を開き、その収益金は、慈善事業や各地の災害発生時の義援金として贈られた。会員には当初、仏教各宗派の女性信者が参画していたようだが、〇七年に浄土真宗本願寺派が仏教婦人会連合本部を結成して、女性信者の組織化を図ると、その関係団体としての色彩が強くなっていった。このころ、会員も五千名近くとなり、一年に活動の拠点として六角通烏丸東入南側に三百五十坪の敷地を購入し、六角会館を建設した。会館は二階建て、六月一日、九条武子・京都府知事代理事務官ら参列のもと盛大な開館式を挙行し、式後、岡崎博覧会場跡地で恒例の慈善市を開催した。⁽⁵⁶⁾

大正期に入ると慈善活動がさらに活発化し、貧困者の健康維持のため牛乳給与活動、巡回無料診療、災害罹災者への義援金の寄贈などの活動を実施し、昭和初期には、会館で真宗講座・無憂華講座・冬期講座などがはじまり、開法道場としての実践・伝道も活発化した。⁽⁵⁷⁾

婦人法話会館 日露戦争を契機として、仏教婦人会の活動が高まりを見せた。一九一一年一〇月には、大谷派の女性教化団体である大谷派婦法話会が、「婦人法話会館」を建設した。

婦人法話会は、一八九〇年九月に京都大谷派寢殿で開会式が行われて発会した。本山職員等の婦人を集めて法話を聴聞させ、その親睦を図るのが目的であった。開会式には北垣知事婦人をはじめ三百名以上が参会した。⁽⁵⁸⁾

日露戦争に際して婦人法話会は、繻帯の寄贈、傷病兵士への書籍・菓子等の寄贈、出征兵士への日用品の寄贈、出征兵士家族の慰問、戦病死者追弔法会の執行などを実施した。また、こうした会務の拡張によって、趣意書を發表して会則を制定した。本部を京都本山に置き、各地に支部の設置を促した。戦後、一九〇七年四月には、二千余名の



図7 六角会館（『京都婦人慈善教会・京都仏教婦人会・六角仏教会 百年のあゆみ』1993年）



図8 婦人法話会館（大谷派本願寺参拝部編・発行『写真帖』1928年）

来会者を集めて第一回春季大会を開催し、翌年に機関誌『婦徳』を創刊した。⁽⁵⁹⁾ 一一年一月、会員が一〇万人に達した婦人法話会は、親鸞六百五十回遠忌の記念事業として、会館新築計画を発表し、全国会員に協力を求め資金募集に着手した。一〇月一〇日に挙行された開館式には、一千人以上の会員が参集したという。建築場所として、東本願寺北側の諏訪町魚棚下る西側を本山より提供され、間口七間（約二二・七メートル）・奥行八間（約一四・六メートル）の会館と事務所が新築された。⁽⁶⁰⁾

五、大正期「会館時代」の到来

大正期に入ると、一九一五（大正四）年五月に求道会館の建設がはじまり、同年六月に中央仏教会館の建設計画が浮上するなど、東京での仏教会館建設に向けた動きが活発化した。こうした「会館時代」の到来は、新たな仏教潮流の展開を想起させるものでもあった。

寺院の会館化 一九一五年八月『中外日報』掲載の論説は、「会館時代来れ」との見出しを掲げ、「現実的進歩的民衆的の宗教生活の中核心たるべく会館時代は現出せんとす」と述べた。さらに「寺院の会館化」の必要性を次のように主張している。

寺院化の会館化とは寺院に付帯する中世的の因襲を脱落してその本質を近代的に表詮するの義なり即ち、僧侶の私的物質的生活の資具としての寺院を变革し、因襲的儀礼の環境としての寺院を批判し、僧侶と檀信徒の伝習的關係を一洗して現代の宗教生命そのもの、実質に根基をもとめ現代生活そのものを新しき接触をもとむるにあり⁽⁶⁾

このように、大正期に仏教会館は、新たな仏教潮流の象徴的存在と目され、数多くの仏教会館が建築されるようになった。

求道会館 前述のように、大正期に入り、会館時代の到来を強く印象づけたのが「求道会館」の建築であった。建築を推進した近角常観（一八七〇—一九四一）は、すでに大日本仏教青年会の幹事時代から会堂建設に積極的に取り組んでいた。一九〇二（明治三五）年三月、欧州留学から帰国した近角は、本郷森川町の二階建家屋を「求道学舎」と命名し、日曜講話をはじめるとともに、一〇数人の学生を寄宿させ共同生活を開始した。なお、この家屋は、宗教法

案反対運動の推進拠点として、大谷光演（真宗大谷派新門、後に二二代法主）から与えられたものであった。近角の洋行中は、清沢満之が同志たちと居住して「浩々洞」と称していたが、六月に浩々洞が本郷東片町に移転し、近角に明け渡されていた。⁶²

一九〇三年一〇月、近角は、求道学舎に多くの聴衆が参集するようになり、手狭となったことを受け、「求道会館設立趣意書」を発表した。⁶³ 趣意書と同時に『政教時報』に寄稿した「求道会館設立の趣旨を披瀝す」では、会館建設

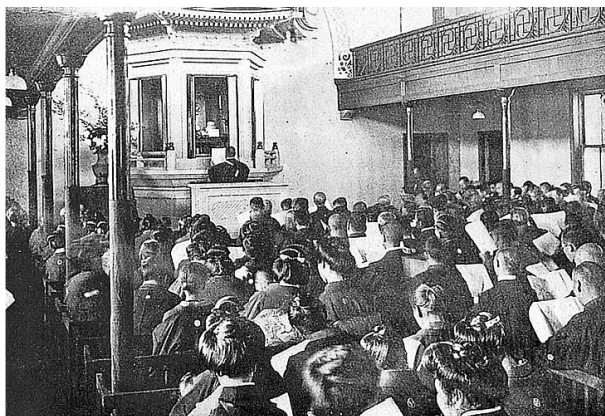


図9 求道会館落慶式（『求道』13巻1号、1916年1月）

が大日本仏教青年会の幹事時代からの宿志であり、学生を中心とする修養の場としたいとの趣旨が記されている。⁽⁶⁴⁾ 一年夏、第一回夏期求道会の開催を機に、建設の相談会が開かれ、改めて小河滋次郎・柏原文太郎・澤柳政太郎が発起人となり、諸経費三万五千円を見込んで本格的な募金運動に着手した。⁽⁶⁵⁾

各方面より寄付金が集まり、一九一五年五月に起工、同年一月三〇日に落慶式を迎えた。式では、井上円了・楠順次郎・南条文雄の祝辞があり、井上円了は、次のように述べている。

是までの我國の仏教の寺は、あれは儀式を行ふに適したものであつて、演説したり教会を開くといふ上には至つて迂遠な建方である。どうしても此寺の建築も取変へなければならぬといふことも申して置く。⁽⁶⁶⁾

会館は、煉瓦石造二階建て、建坪九〇坪三合、間口四〇尺（約一二・一メートル）・奥行八〇尺（約二四・二メートル）、一階に椅子が備え付けられ、二階のギャラーリを含めると約一千人を収容可能であつた。一階後面には二室の洋室があり図書室・応接室に充てられ、二階後面には信仰談話会のための二室の和室が配置されていた。⁽⁶⁷⁾ 大正期、政治的・経済的に大きな社会変動期を迎え思想的動揺が広がるなかで、近角の活動は、成功を夢見て上京した青年たちの心をとらえ、求道会館には煩悶を抱えた多くの青年らが参集した。

仏教中央会館 一九一五年六月二三日、上宮教会副会長の河瀬秀治の喜寿祝賀会が上野寛永寺大書院で開催された。この祝賀会に参集した二百余名のなかから、「仏教中央会館」の建築計画の議が浮上し、一〇月二四日上宮教会で發起人総会を開催し、以下の要項を決議した。⁽⁶⁸⁾

一、今上天皇御即位御大典の記念として会堂を建設す。

一、本会堂は中央仏教会館と称す。

一、本会堂は東京市内枢要の地に建設す（目下場所選定中）。

一、本会堂には聖徳太子の尊像を奉安す。

一、本会堂は仏教各派各団体の演説講話及国民道德の涵養に関する各種集会等の使用に提供す。

一、本会堂に付属倶楽部を設け仏教徒の懇親を計る為め各種の集会其他の事業に提供す。

一、本会堂に図書館及寄宿舎を併設す。

一、本会堂建設寄付予定額は金三十万円とし十万円募集確定の上は速に工事に着手す。

一、本会堂建設寄付金募集方法は実行に委任す、以上⁽⁶⁹⁾

一九一六年一月の実行委員会で評議員四〇名を互選し、さらに常務幹事専務に柴田一能、常務幹事常務に山田一英と三輪政一、常務員に大森禪戒・渡辺海旭・和田幽玄・安藤正純・島地大等を選出した。⁽⁷⁰⁾ 当時の仏教各宗派は、神社問題や旧寺領返還問題、米国籍民問題・中国布教権問題など共通する課題に直面して協調路線を採りつつあり、一五年一二月に「仏教連合会」が組織されていた。⁽⁷¹⁾

各宗派に協調機運が高まるなか、一六年二月に日蓮宗、四月に時宗・真言宗豊山派が会館建築への助成金の交付を決定し、五月には仏教連合会評議員会で事業協賛が決議された。その後も、真言宗智山派・曹洞宗・天台宗・臨済宗妙心寺派・真宗大谷派・本願寺派・浄土宗などが次々と助成金の交付を決め、一二月に建設予定地として神田駿河台下東明館跡地約五百坪を選定した。

一方、会館の実行委員会は、建築促進に向けて、毎週日曜日に中央仏教少年会・中央仏教講演会を開催し、米騒動に際して白米廉価販売を行うなどの事業も展開した。一九二〇年二月に工事に着手し、翌二十一年一〇月一〇日に落成。

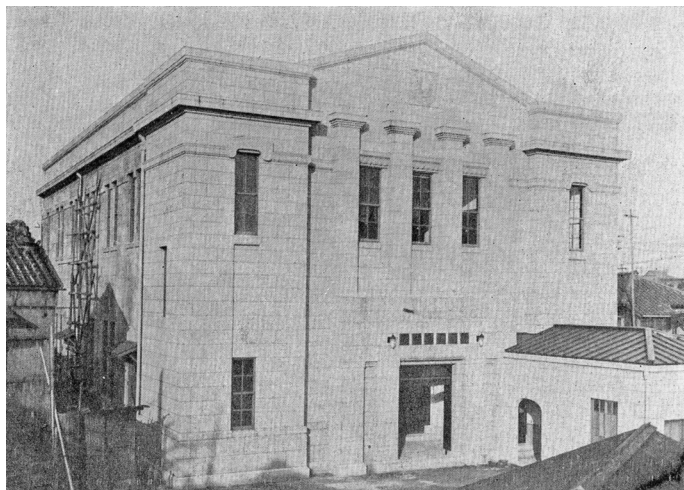


図10 中央仏教会館〔1921年創建〕
(『中央仏教』5巻11号、1921年11月)



図11 中央仏教会館〔1929年再建〕
(『第二回汎太平洋仏教青年会大会記念写真帖』1934年)

一月三日に盛大な開館式が挙行された。二階建て、一階の講堂は一四二坪で一千五百人収容可能、二階に大小会議室や食堂などが配置された。会館の運営のため、文部内務大臣の認可を受けて財団法人中央仏教会が設立され、河瀬秀治が理事長に、柴田一能が副理事長に、渡辺海旭・安藤正純が理事に就任した。会館では、毎週日曜日に仏教講演会が開催されたほか、仏教界内外の団体・個人の使用にも提供されたが、二年後の関東大震災で烏有に帰した。⁽⁷²⁾

一九二九（昭和四）年一月に至って、中央仏教会館は東京一ツ橋に再建された。講演会や各種会合に利用されたほか、社会事業研究会、仏教連合会、仏教護国団、仏教少年団連合会、仏教朝鮮協会等の各宗連合組織の中央事務所が置かれた。⁽⁷³⁾

明治会館再建 一九一六年七月には、一三年二月により焼失した「明治会館」の再建が本願寺派当局の合意を得て決定した。翌九月に起工し、一八年七月に開館式を挙げた。木造洋館塔家造二階建て、二階に五百名分の椅子を並列した大講堂と控室、一階に法話室・小会議室・応接室・事務室・食堂などを配置し、総面積約二二二坪であった。精神修養講話・仏教研究会・演説会のほか、慈善的演劇会・懇親会・娯楽会など各種集会の場としても提供され、図書館・留学生寄宿舎なども付設する予定であり、一八年七月六日に盛大な開館式を挙行了た。⁽⁷⁴⁾

しかし、この会館も関東大震災で倒壊・焼失した。震災後、内務省臨時救護事務局から提供されたバラックを建築し、罹災者宿泊所・罹災学生寄宿舎とし、人事相談・婦人職業紹介等の事業を行ったが、復興とともに撤去され、跡地も一九五〇年に売却された。⁽⁷⁵⁾

関東大震災の影響 一九二三年九月一日の関東大震災により、多額の経費をかけた仏教中央会館と明治会館とが、新築後わずか数年で烏有に帰した。震災は、改めて自然災害の多い日本で、木造の寺院建築に焼失等のリスクの高いことが認識される結果となった。

築地本願寺などの設計を手がけた建築家の伊東忠太（一八六七—一九五四）は、関東大震災の三か月後に『中外日

報』に「寺院将来の建築」と題する論説を寄稿している。そのなかで、帝都復興院が、罹災跡地の二割の地域を防火区域に設置し、そこでの建築物を鉄筋コンクリート（混泥土）造とすることを推奨したことに言及している。さらに伊東は、木造建築の方が経費的にも増額になることを指摘した上で、次のように述べている。

要するに市街の寺院は鉄筋混泥土とならねばならぬと思ふ、こう申すと歴史ある寺院建築を破壊するものと悲む人もあるが止むを得ない、丁度我々日本人が洋服を着るやうなものである、此際大震災火災を機として寺院建築に革新を行ふべきである。^四

こうして、震災後の仏教会館の建築には、鉄筋コンクリート造洋館が急速に普及していくこととなった。さらに伊東は、以後の寺院のあり方についても、次のように提言している。

最後に余計なやうだが今後建築せらるゝ寺院は公共的の建物にせられんことを希望する、公衆と最も密接に結び付くことが必要である、特別の場合は別だが将来の寺院をして公衆建築化せしめ公衆のために開放して利用せしむることが必要であることを付け加へて置きたい。^五

関東大震災では、仏教関係施設や境内地などが罹災者の避難場所や救護所となった。こうした経験も踏まえ、震災後に「寺院の社会解放」が、仏教界の取り組むべき課題として浮上していくことともなった。

六、会館建築の京都への波及

東京ではじまった仏教会館の建設ブームは、やがて各宗派の本山が林立する伝統的宗教都市である京都にも波及した。すでに京都には、六角会館・婦人法話会館などが設立されていたが、さらに数か所に洋館の仏教会館が建設された。

京都での建設ブーム 一九二三（大正一二）年四月、『中外日報』掲載の論説「会館時代へ」は、次のように述べている。

京都といふ因襲的な宗教都市においても、時勢は強いもので漸次に清新な色彩を添えてゆく、それは会館の設立である、少時これを仏教界に於いて観察するに中央に六角会館があり、北部に山口会館がある、東六条に高倉会館あらはれ、西六条に顕道会館あらはる、これらの会館は在来の本山の総会所や説教所なるものを凌駕して新しい民衆の教壇として発展してゆかうとする、就中、注目すべきことはその代表的なるものは宗派本山なるもの、支配に依らずして独立してゆくことである。こゝに会館時代が漸を追ふて出現せんとするは吾人の快く感ずることである。^(四)

さらに、この論説では仏教会館が、仏教のあり方を大きく変えていく原動力となるとの展望を次のように記している。

在来の仏教寺院はいかにしても中世紀的な修道場として成立するために都市に介在しながらも、実は都市に同化

してゆくだけの素養を欠いてゐる、この点においては会館は近代的な情調を有する民衆の娯楽所として大に意味を有するものである、寺院より会館への転化は一個の形式であるに相違ないが、かゝる形式の転移はその内容の転化をなすものである、即ち、僧侶本位の教壇がいつしか僧俗不二の教会として変化してゆくであらう、従つて教法は因襲の皮殻をぬぎすて、清新な生命を顕はすに至り、宗教そのもの、開放が営まれやう⁽⁷⁹⁾

高倉会館 一九二二年に立教開宗七百年記念事業の一環として、「高倉会館」が京都市下京区高倉六条上ル（元大谷派高倉学寮敷地）に建築された。五月二三日午前の開館式には、大谷派関係者・府知事・市長代理ら二五〇名の来賓が臨場して盛大に行われ、午後には、鈴木法琛（仏教大学学長）・斎藤唯信（大谷大学教授）らの講演があり、午後七時からの映画上映には三千名の聴衆を集めた。

会館は、一千人から一千二百人を収容可能で、食堂・会議室・休憩室等の付属建物も建築する予定であつた。毎週大谷派・大谷大学関係者らによる日曜講座が開かれたほか、利用希望者にも有料で貸し出され、その使用便覧には次のとおり記されていた。

一、本会館は仏教主義の宣伝、教化事業に関する会合、及各種の講演会、講習会、研究会其他会社組合の総会、各種団体の大会、音楽演奏会、活動写真、陳列会、品評会等の使用に提供致します。但政治、社会運動、営利を目的とする興業はお断り致します。（以下略⁽⁸⁰⁾）

顕道会館 一九二三年四月一四日、「顕道会館」が、西若松町の旧淳風会館跡地に落成し、当時の本願寺派管長代理大谷尊由を迎えて落成開館式を挙げた。会館建築を推進したのは、西本願寺門前にあつた顕道学校の同窓生たちで

あつた。顕道学校は、松田甚左衛門ら篤信の在家信者が一八八五（明治一八）年に設置したもので、農業・商業などの実地有用な学問に力点を置く一方で、仏教主義教育による人格形成を目指した。八九年にわずか五年で廃校となつたが、卒業生のなかには、伊藤長次郎（貴族院議員）・若林乙吉（株丸紅商店監査役）・毛戸勝元（京都帝大教授）、野々村直太郎（龍谷大学教授）、大野開蔵（相愛高等女学校校長）など政財界・教育界などで活躍した者がいる一方、地元へ帰つて商店主や農業を継いだ者も多かつた。そのいずれもが仏教に対する信仰を堅持して、その後の人生を送つたようである。⁸³

一九二一年一月、京都市岡崎の伊藤長次郎別邸で旧顕道学校の同窓会が開かれ、久しぶりに卒業生約六〇名が集集した。その席上、宗教上の知識や思想を交換のため集合する会場として会館建設が提起され、同窓生を中心に寄付金が集められた。場所は西本願寺門前の西若松町、建築費は約八万円、鉄筋コンクリート造二階で、一階に洋風講堂、二階には畳敷の小室を設けて小集会や宿泊に充てることとした。旧顕道学校の関係者を中心に会員制の「顕道倶楽部」が組織され、仏教講演会が開催されたたほか、本願寺派関係団体の各種行事の会場として貸与された。⁸³ また会館では、次の「館是」を掲げていた。

- 一、既成宗教派の諸有ル弊流ヨリ離脱ス
- 一、真理ヲ愛好シ研究ノ自由ヲ認ム

- 一、民衆仏教ヲ宣伝シ在家真宗ヲ鼓吹ス

（中略）

- 一、本館ノ集会ハ、宗教、學術及び芸術等、社会教化進展ニ資スルモノタルヲ要ス
- 一、喫煙スベカラズ

一、本館ノ使用ハ凶弔ノ場合ハ拒否セザルモ吉慶ノ儀礼ハ歓迎ス⁽⁸⁴⁾

顕道会館は、本願寺派との関係が深い一方で、宗派仏教とは一線を画し、在家信者主体の「民衆仏教」「在家真宗」のあり方を模索した。しかし、関係者の高齢化により、昭和初期に本願寺派に寄贈され、現在は京都教務所の所管建物となっている。



図12 顕道会館（『顕道会館十周年記念』1933年）

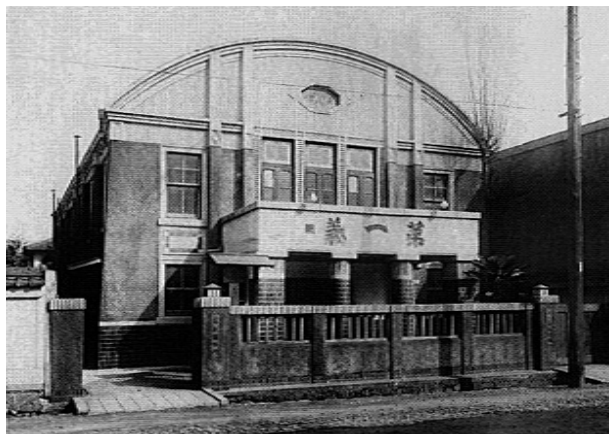


図13 山口仏教会館（『仰景帖』1938年）

山口仏教会館 一九二四年、実業家山口玄洞（一八六三—一九三七）により「山口仏教会館」が、京都寺町丸太町上ル東側に建設された。山口は、尾道の出身で、輸入モスリンの独占販売などで財をなし、高額納税者として貴族院議員もつとめた。晩年は事業を後進に譲り、信仰生活に入り、郷里の尾道や京都・滋賀の寺院に数多く堂舎を寄進し、大阪の病院や研究所建設に多額の寄付を行った。山口は、特に臨済宗方広寺派管長の間宮英宗に私淑し、当初は自宅に招請して法話会を開催していたが、個人の住宅では来会も遠慮気味であることから、来会自由の会館を建設して、広く教化の便宜を図ることを企図し、間宮を館長に迎えて山口仏教会館を建設した。設計は求道会館と同じく武田五一（一八七二—一九三八）で、インドのアジャンター様式を加味した概観で、鉄筋コンクリート造二階建であった。⁸⁵⁾

七、地方への波及と多様化

大正末年から昭和初年にかけて、仏教会館の設立は地方都市へとひろがり、設置主体・目的・事業内容なども多様化していった。その代表的なものを以下に紹介しよう。

山内慶華会館 一九二三（大正一二）年十一月、長崎市今町に山内慶華財団の事業と一環として「山内慶華会館」が建設された。山内慶華財団は、長崎県壱岐出身で石油輸入業やガス会社を手がけた実業家故山内善三郎の遺志を継承した遺族より、二五万円の寄付を受け、二二年七月に認可・設立された。事務所を京都市三条に置き、本願寺派関係者が理事に就任し、学生への学資補助、真宗教義の研究・宣伝の支援などを主な事業目的とし、後に京都洛西の角坊別院門前に学生寄宿舎も建設した。会館は、煉瓦造洋館二階建の総面積八〇坪、一階に幼稚園が開設され、二階を講堂として毎月二回の定期仏教講演会が開催され、市民の公会堂としても提供された。⁸⁶⁾

築地会館・仁風会館・深川仏教会館 関東大震災後、前述のように、焼失した明治会館の跡地に罹災者救護のための施設が建築された。築地本願寺と本願寺派とは、同様の「会館」の名称を付した社会事業施設を、他にも数か所東京

に設置している。

築地本願寺跡地には、一九二三年一〇月に内務省臨時震災救護事務局よりバラック建築資材の提供を受け、翌月より労働者宿泊所、罹災盲生収容所、託児所の三事業を実施した。二四年六月に新宿舍が完成し、宿泊所をこの地に移し「築地会館」と命名した。一日に一三名が廉価で宿泊することができ、毎週月曜日に宿泊者を対象に精神修養会を開催した。

東京三河島町（現荒川区）は震災で火災を免れたものの、密集した長屋の多くが倒壊し、要改善地域として社会的施設設置の必要に迫られていた。震災直後、警視庁が罹災者収容のため、この地にバラック九棟を建設し、築地本願寺はその内の一棟を譲渡され託児所を経営していた。その後、本願寺救災事務所の補助金を得て新会館の建設に着手し、一九二四年一月に落成して「仁風会館」と命名した。一階に遊技場、二階に大講堂があり、託児事業のほか、幼稚部・少年部・児童図書館・教化部・婦人裁縫部・助産部・助葬部・相談部が設けられ、多様なセトルメント事業を展開した。

震災直後、深川区（現江東区）八幡公園内には、東京市が罹災者を対象としたバラックが建てられ、配給・施薬・浴場・託児所・夜学校のなどの施設も併設されていた。バラック撤去後、すべての施設が閉鎖されたが、地域住民の託児所を望む声が強く、後援会を組織して約八千円の寄付金を集めた。この寄付金を託された築地本願寺は、二五年九月に託児所の建設に着手し、一二月に竣工。「深川仏教会館」と命名して、翌年一月に児童園を開設し、二月より日曜学校、講演会、活動写真上映等の教化事業を開始した。⁸⁷⁾

このほか、震災を契機として設置された社会事業施設に「会館」の名称を付した事例として、大谷派の「横浜児童会館」、曹洞宗の「鶴見社会館」、東京浅草寺の「浅草寺三軌会館」⁸⁸⁾などがあり、その後も仏教系のセトルメント（隣保館）が、各地で設立されるようになった。

東大仏青会館・九大仏青会館 大正期には衰退していた仏教青年会の活動も盛んとなり、大正期末には、東京帝国大学と九州帝国大学の仏教青年会により会館が設立された。

明治末年以降、東京帝国大学の仏教青年会組織である徳風会は衰退していたが、一九一九年に東京帝国大学仏教青年会（略称「東大仏青」）として再結成された。さらに二四年一〇月には、約八万円の経費を投じて、「東京帝国大学仏青会館」（略称「東大仏青会館」）が本郷に竣工した。初期構想では鉄筋コンクリート造を想定していたが、不況のため木造モルタル塗三階建となり、三五年には本格的会館の建築を目指して本会館期成会が結成された。

本格的な会館の建設は、戦前には実現しなかったものの、二四年建設の会館一階には六百人以上を収容可能な大講堂を備えており、ここを拠点に仏教青年会の活動は活発化していった。二四年一月二日に開館式が行われ、その際に、①研究事業（宗教・社会・思想問題等に関する研究調査、信仰問題談話会）、②社会教化事業（講演会、講習会、図書発行、宗教図書室経営、補習教育、少年教化事業「日曜学校」、人事法律相談所設置、学生寄宿舎設置）、③連絡事業（都下各仏教青年会との連絡、全国各大学及高等諸学仏教青年会との連絡、其他青年仏教徒諸団体との連絡）など、多彩な新事業計画が発表され、順次実施されていった。また、会館は外部の各種会合に有料で貸し出され、二四年設立の東京各大学仏教青年会連盟、三一年設立の全日本仏教青年会連盟など、その後に活発化した仏教青年会の連合組織の中核的施設としての役割も果たした。⁸⁹⁾

九州大学仏教青年会は、一九〇七（明治四〇）年五月、「京都帝国大学福岡医科大学仏教青年会」として発足した。一宗一派に偏しない仏教精神の涵養を通じて、同大学における学生・看護婦・教職員・患者に仏教の妙理を会得させ、不動の境地に至らしめることを目的としていた。発足当初の活動は、月次講演会・信仰座談会・夏期講演会などを開催することが中心で、著名な仏教者が講師として招聘された。一一年、大学の名称変更にもない「九州帝国大学仏教青年会」（略称「九大仏青」）と改称した。一八年には、初代会長に就任した旭憲吉教授が中心となって、博多承天

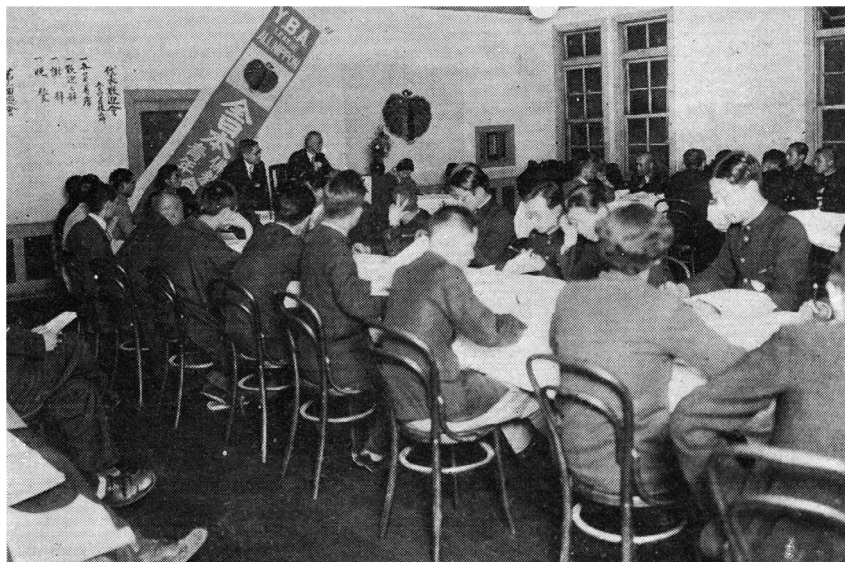


図14 東大仏青会館で開催された第二回全日本仏教青年会連盟総会
(1932年5月6日、『昭和八年仏教年鑑』1932年)



図15 九大仏青会館
(『九州大学仏教青年会創立一〇〇周年記念誌慈悲のこころ 百年』2009年)

寺内祥勝院に無料診療院を設置し、その後、地方巡回診療・災害慰問救護活動なども実施した。二二年、社団法人としての認可を受け、二六年三月には、福岡市内に会館及び学生寮「九州帝国大学仏青会館」(略称「九大仏青会館」)を建設し、附属中央日曜学校も開設した。⁹⁰⁾

心光会館 震災後、人心の精神的安定の必要性を痛感していた大谷派浅草別院は、一九一四年二月、境内地に「心光会館」を建設した。鉄筋コンクリート造洋館二階建て、一階に五百人収容可能の講堂があり、二階に大小八室の和室があった。

毎日曜日に講演会、水曜日夜に精神問題応答会、土曜日に求道講話が開催され、東京大谷婦人会・浅草本願寺日曜学校・東京大谷児童協会などの関係教化団体の本部事務所が置かれ、これら諸団体の行事も開催された。また、外部団体にも有料で貸し出され、「心光会館使用規程」には、「本会館ハ仏教主義ノ宣伝、教化ニ関スル会合及此種ノ講演会講習会研究会其他館長ニ於テ適當ト認メタル諸会合ノ為メニ提供致シマス、但営利ノ目的トスル興行ハ御断リ致シマス」などと記載されていた。⁹¹⁾

地方教区・別院等付設の会館 本願寺派・大谷派などでは、大正末年以降、東京だけでなく地方別院や教区・教務所でも、会館の建設が相次いだ。

一九二四年、本願寺派金沢別院輪番であった石原堅正の尽力に依り、仏教青年会館が開館した。金沢高等学校・金沢予備校・幼稚園などが併設され、青少年教育の用に供された。⁹²⁾

一九二五年一月、大谷派金沢別院の境内地に「金沢真宗会館」が落成した。建物は、二階建て、同派金沢教区の教務所事務所が置かれ、総会所・婦人法話会・日曜学校・幼稚園・講習会等に使された。⁹³⁾

翌二六年一月には、本願寺派鹿児島別院の境内地に「大正会館」が竣工した。建築様式は近世式サラセン式を加味したもので、耐震・耐火・音響等の最新式の設備を備え、鉄筋コンクリート造二階建てであった。建坪一二〇坪、総

延坪二三〇坪で、一階の講堂は洋式、二階は純日本式であり、一般仏教講座・婦人講座・青年講座などが開催された。⁽⁹⁴⁾
このほか、本願寺派機関誌『教海一瀾』、大谷派機関誌『真宗』の記事から、各地で以下の会館が建設されていたことを確認できる。

- 一九二七年十一月落成、本願寺派高知別院「高知別院会館」
- 一九二八年三月落成 本願寺派兵庫教務所「神戸仏教会館」
- 一九二八年五月落成、本願寺派山口教区「本願寺山口会館」
- 一九二八年七月落成、本願寺派高岡教区「水波仏教会館」
- 一九三〇年三月落成、本願寺派熊本教区「本願寺熊本会館」
- 一九三二年落成、本願寺派福井別院「福井仏教会館」
- 一九三二年十二月落成、本願寺派兵庫教務財団「姫路仏教会館」
- 一九三二年四月落成、本願寺派別府別院「別府仏教会館」
- 一九三二年十一月落成 本願寺派津村別院「大阪津村別院会館」
- 一九三三年一月落成 徳島市富田浜側本願寺派説教所「徳島本願寺会館」
- 一九三三年四月落成、大谷派難波別院「大谷会館」⁽⁹⁵⁾

本願寺派・大谷派以外にも、浄土宗の「伝通会館」（東京小石川・一九二九年十一月設立）、仏光寺派の「婦人会館」（京都市・一九三〇年設立）、時宗の「教浄寺善友会館」（岩手県盛岡市・一九三三年四月設立）などの存在を認⁽⁹⁶⁾で⁽⁹⁶⁾きるが、本願寺派関係設立の会館が圧倒的に多かったようである。

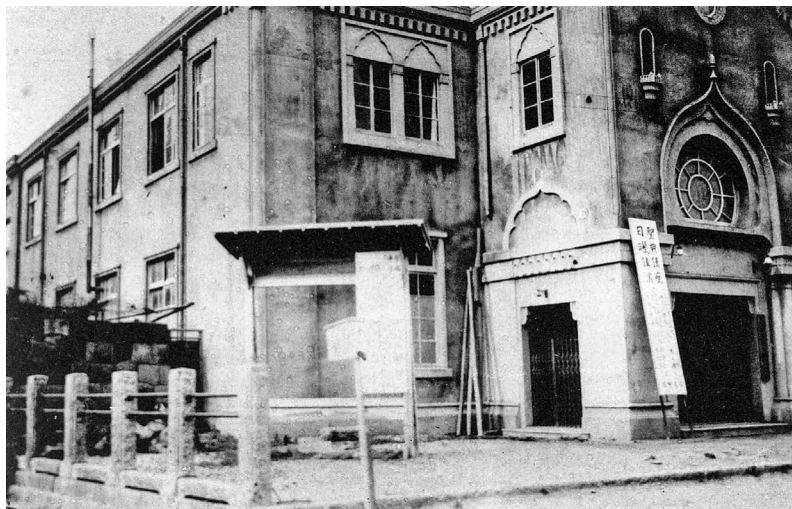


図16 心光会館（大谷派本願寺参拝部編・発行『写真帖』1928年）



図17 大正会館
（同会館落成記念絵葉書・本願寺派鹿児島別院所蔵）



図18 水波仏教会館（同会館絵葉書・筆者所蔵）

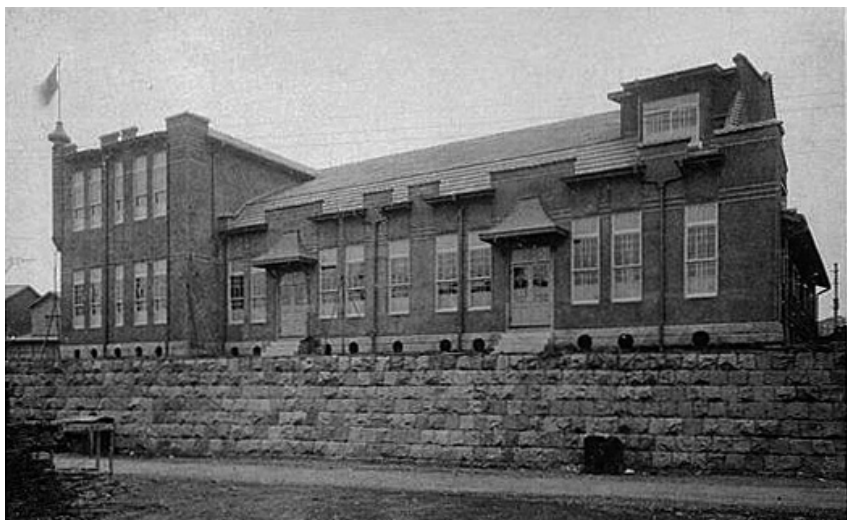


図19 本願寺熊本会館
（同会館落成落成記念絵葉書・本願寺派鹿児島別院所蔵）

春風荘・大阪仏教会館・芦屋仏教会館 資産家が資金を提供して会館を新築するケースも多く見られるようになった。こうした事例は、前述の山口玄洞による山口仏教会館が先駆的であるが、その後、阪神地域を中心に富豪らの資金提供により仏教会館が建設された。

春風荘は、一九二六年二月に大阪天王寺公園北門玉水園内に建設された。永田駒三郎が単独で五万円の経費を投じて建設され、大阪では初めての仏教会館であつた。聖徳太子像を本尊として安置し、毎月第三日曜日の午後一味会という信仰団体の仏教講演会が開催された。一味会には婦人部と青年部も組織されていた。二月七日の落成式には、木辺派法主の木辺孝慈、本願寺派の利井興隆らが講演した。永田駒三郎という人物の経歴等は不明であるが、大阪の富豪であつたと考えられる。『中外日報』は、この春風荘を「一般民衆には一寸寄りつけぬ別荘風の建築様式といひ、大垣をはめたギコチない装ひから何から何までがブルジョア的で折角五万円を投じて建てながら一向民衆の爲にはなつて居ない」と酷評している。⁹⁷

大阪仏教会館は、一九二六年頃に大阪市西成区橘通に建設された。建設の主体となつた仏教奉仕会は、二〇年三月に発足し、大阪市北区宝珠院（真言宗御室派）に本部を置いた。会則によれば、「仏教ヲ信スル者ヲ以テ組織シ弘法大師ノ遺訓ヲ守リ上皇室ヲ尊崇シ下万民ノ慶福ヲ増進スルヲ目的」とし、碩徳高僧を招聘した布教活動、文書伝道などを事業に掲げていた。会設立の主唱者は、島徳蔵・永田仁助・津田勝五郎・山中直七ら大阪の実業家たちであつた。特に会長の津田勝五郎（守保）と副会長の山中直七とは鉄鋼問屋で財をなした鉄商組合仲間で、この二人の多額の寄付で会館が建設されたようである。⁹⁸

芦屋仏教会館は、一九二七年、伊藤長兵衛（七代目、号「長堂」、一八六八—一九四一）により、兵庫県芦屋市に建設された。伊藤長兵衛は、滋賀県犬上郡河瀬村（現彦根市）で製糸業を営む若林又三郎の三男として生まれ、一八八二年に繊維品の小売業を全国展開する同郷の六代目伊藤長兵衛のもとへ営業見習として入家した。翌年、六代目伊



図20 芦屋仏教会館
(『芦屋仏教会館と其使命』1927年)



図21 重信会館
(2023年3月22日筆者撮影)

藤長兵衛の次女やすと結婚して同家に入籍し、九三年に七代目長兵衛を襲名した。七代目長兵衛は、丸紅の前身である丸紅商店の初代社長として経営に手腕を振うとともに慈善事業も手がけ、転居した芦屋では、地域で仏教信仰に親しむ場として芦屋仏教会館を建設した。⁹⁹⁾

建築面積は六〇坪で、鉄筋コンクリート造、地下一階・階上三階であった。地階に食堂・料理室・管理入室など、一階に約四百人収容の大講堂と事務室など、中二階に畳敷の約百人収容の聴講席・電機配電室など、二階に貴賓室・中講堂・会議室など、三階に階段室が配置されていた。会館を拠点として、崇信会という宗教修養団体が組織され、発足時に約二百人の会員があり、崇信会主催による仏教講演会や学術講演会が定期的に会館で開催された。このほか、日曜学校・婦人会・仏教青年会の組織、雑誌の発行なども計画され、会館は一般の文化・社会事業にも廉価で貸与された。¹⁰⁰⁾

以上のほか、各地の資産家で宗派に会館を寄付した事例として、一九二五年に木原善太郎が本願寺派福岡教区に寄付した「城南仏教会館」、二六年に高松市の直江フサ子⁽¹⁾が本願寺派に寄付した「直江仏教会館」、同年に福岡の立石善平が大谷派のために建設した「福岡同朋会館」、三〇年に実業家で大谷派本山会計常務員でもあった田代重右衛門が京都市下京区廿人講町に建設した「重信会館」などがある。⁽²⁾

おわりに

大正期に建設されはじめた頃の仏教会館には、宗派仏教の旧弊を打破し、僧侶・住職のマンパワーに依拠する寺院経営・教化活動から、民衆に開かれた教化組織・運動への変化を促す原動力になることが期待されていた。

しかし、実際にはそうはならなかった。多くの仏教会館は、宗派とその関係団体や資産家によって設立され、多数の民衆が設立に関わるケースはまれであった。会館の運営にも、多くの人々が主体的に関わる事例は少なく、あくまで部外者の聴衆として、会館の講演や行事に受動的に参加するにとどまった。

仏教会館への大きな期待を表明した『中外日報』も、昭和になると、大阪での会館の事例を取り上げて、何ら仏教の民衆化に寄与していないと厳しく批判するようになった。⁽³⁾戦後は多くの会館が閉鎖され、現在も宗派とは別に、仏教会館としての独自の活動を継続しているのは、六角会館、芦屋仏教会館、東大仏青会館、九大仏青会館など数例を数えるに過ぎない。

その意味で仏教会館は、仏教教化事のひろがりと多様化に資する一面があった一方で、大正期以降の仏教の「教養主義」「精神修養」的傾向の表層・脆弱性を抱え込むものであったと言えるのかもしれない。

〔註〕

- (1) 特殊布教については、中西直樹「真宗布教近代化の一断面―本願寺派「特殊布教」の成立過程を中心に―」（中西直樹・近藤俊太郎編著『令知会と明治仏教』不二出版、二〇一七年）を参照。
- (2) 一八八八年八月二五日に東京府知事宛に申請された「私立女子文芸学舎設置願」（東京都高文書館所蔵）添付の図面に よる。なお、当該申請書は、「千代田女学園の歴史」編集部編『千代田女学園の歴史』史料編第一巻（千代田女学園中学校・高等学校、一九九四年）に収録されている。
- (3) 「年譜」（二葉憲香・福嶋寛隆編『島地黙雷全集』第五巻（本願寺出版協会、一九七八）、「千代田女学園の歴史」編集部 編『千代田女学園の歴史』史料編第一巻（千代田女学園中学校・高等学校、一九九四年）、「白蓮教会講堂建築寄付人名 表」（一八八三年四月五日・五月一三日付『奇日新報』）、「白蓮会」（一八八三年一月二七日付『奇日新報』）、「講義」（一八八四年二月七日付『奇日新報』）、「白蓮会」（一八八四年二月二五日付『奇日新報』）、「白蓮会」（『婦人教会雑誌』 一号、一八八八年二月）。
- (4) 「仏教新婚式」（『三寶叢誌』九九号、一八九二年六月）、「仏教者新婚式例」（『婦人雑誌』五四号、一八九二年七月）。藤 井宣正の経歴に関しては、中西直樹「明治・大正期東京の青年仏教者―徳風会から東京大学仏教青年会へ―」（『仏教文化 研究論集』第二〇号、二〇二〇年一月）を参照されたい。
- (5) 中西直樹『日本近代の仏教女子教育』第一部第一章（法藏館、二〇〇四年）。
- (6) 桑田衡平の経歴については、高木武三郎編『上宮教会八十年史』（社会福祉法人上宮教会、一九七七年）を参照。
- (7) 中西直樹『仏教と医療福祉の近代史』第一部第一章（法藏館、二〇〇〇年）。
- (8) 「仏教講堂の新築」（一八九〇年八月一二日付『明教新誌』）、「浄心館開館式」（一八九〇年九月一〇日付『明教新誌』）、「浄土館開業祝辞」（一八九〇年九月一六日付『明教新誌』）。
- (9) 『信道会館創立四十周年記念誌』（財団法人信道会館、一九三二年）、「信道会館創立八十周年記念誌」（財団法人信道会 館、一九七二年）。
- (10) 明如伝記編纂所編『明如上人伝』六五四―六六三頁（明如上人廿五年忌臨時法要事務所、一九二七年）によれば、一八 八四年一二月二日に内務省に設立を届け出た説教所は、本願寺派だけで一四八に及んだとされる。

(11) 当時の仏教雑誌には、嶺南山人「駿河台ニコライ会堂落成の風説を聞て所感を陳ふ」(『令知会雑誌』六七号、一八八九年一〇月)、虎白山人「ニコライ堂」(『反省会雑誌』六年二五号、一八九一年二月)、虎白山人「ニコライ堂を観る」(『反省会雑誌』六年五号、一八九一年五月)など、東京復活大聖堂に言及した論説・記事を散見し、関心の高さをうかがうことができる。

(12) 「仏教教会堂を起さんとす」(ケイエス生の書翰)『伝道会雑誌』五年一号、一八九二年一月。

(13) 「仏教教会堂設立の必要」(一八九六年四月一四日付『明教新誌』)。

(14) 「大日本護法館趣意書」(一八九六年四月二二日付『明教新誌』)。

(15) (16) 前掲「明治・大正期東京の青年仏教者―徳風会から東京大学仏教青年会へ―」。

(17) 「大日本仏教青年会秋季大会」(一八九八年二月一四日付『明教新誌』)、「仏教青年会大会」(『佛教』一四五号、一八九八年二月)、「大日本仏教青年会の近況」(『政教時報』一号、一八九九年一月一日)。

(18) 「大日本仏教青年会の春期大会」(『政教時報』八号、一八九九年四月一五日)、「大日本仏教青年会秋季大会」(『政教時報』二二号、一八九九年一月一日)、「仏教青年会春季大会」(『政教時報』五一号、一九〇一年三月一五日)。

(19) (20) 前掲「明治・大正期東京の青年仏教者―徳風会から東京大学仏教青年会へ―」。

(21) 加藤咄堂「大日本仏教青年会に望む」(一九〇九年七月七日付『中外日報』)、吞仏「奮起せよ青年仏教徒」(『新仏教』一四卷二号、一九一三年二月)。

(22) 「仏青の会館建築」(『警世』二二八号、一九一四年二月)、「仏青会館準備相談会」(『警世』二二九号、一九一四年三月)。

(23) 中西直樹「新仏教とは何であったか―近代仏教改革のゆくえ―」第七章(法藏館、二〇一八年)。

(24) 「会堂建設計画発表」(『新仏教』六卷七号、一九〇五年七月)。

(25) 高島米峰「会堂建設計画発表について」(『新仏教』六卷八号、一九〇五年八月)。

(26) 「新仏教徒同志会々々堂」、高島米峰「新仏教徒同志会々々堂について」(『新仏教』七卷四号、一九〇六年四月)。

(27) 前掲「新仏教徒同志会々々堂について」によれば、約九か月間に集まった寄付金は、設計料の支払いですべて費消している。「新仏教」一〇巻一号(一九〇九年一月)掲載の「謝辞」によれば、この段階でも、ユニテリアンの惟一館を借用し

て活動しており、石炭や茶の代金さえも支払っておらず、会の運営は経済的にかなり苦しかったようである。

- (28) 「仏教青年伝道会史」(『青年伝道』九三号、一九一一年六月)。常務幹事の経歴等については、井上泰岳編『現代仏教家人名辞典』(現代仏教家人名辞典刊行会、一九一七年)、大橋俊雄『浄土宗仏家人名事典』(東洋文化出版、一九八一年)を参照。

- (30) 前掲「仏教青年伝道会史」。

- (31) 「本会綱領」(『青年伝道』一八号、一九〇五年二月)。

- (32) 来馬琢道「釈尊降誕祝賀園遊会の記」(『青年伝道』二三号、一九〇五年五月)、「会則」(『青年伝道』三七号、一九〇六年八月)、「青年伝道会小史」(『青年伝道』五〇号、一九〇七年九月)。

- (33) 「会則改正」(『青年伝道』四二号、一九〇七年一月)。

- (34) 来馬琢道「落花録(大日本仏教徒大会雑記)」、『雑報』(『青年伝道』四六号、一九〇七年五月)。

- (35) 「仏教青年伝道会堂建設趣意書」(『青年伝道』四九号、一九〇七年八月)。

- (36) 「仏教青年伝道会堂建設発表」(『青年伝道』四五号、一九〇七年四月)、「仏教青年伝道会堂建設發願文」(『青年伝道』五三号、一九〇七年二月)、「仏教青年伝道会堂の建築」(『青年伝道』九三号、一九一一年六月)。

- (37) 「伝道会堂開堂式の記」(『青年伝道』九四号、一九一一年八月)。開堂式の様子を批判したものととして、加藤咄堂「青年仏教徒の妄動」(『新仏教』一〇巻七号(一九〇九年七月)がある。

- (38) 「仏教会館設立寄付募集」(『本会記事』(『万国仏教青年連合会会報』第二号、一九〇三年一〇月)。

- (39) 中西直樹「本願寺と鉄道の近代史」第三章(三人社、二〇二三年)。

- (40) 前掲『明如上人伝』八〇六頁、「本派總會所移転」(一八九六年八月九日付『京都新報』)、「本派新築總會所の開所」(『教海一瀾』二九号、一八九八年九月二六日)。

- (41) 「本願寺会館設立」(『教海一瀾』三二三号、一九〇六年六月二日)。

- (42) 「本願寺会館の発館式」(『教海一瀾』三二七号、一九〇六年六月三〇日)。

- (43) 「本願寺会館の開館式」(『教海一瀾』三三八号、一九〇六年七月七日)、「本願寺会館の講話」(『教海一瀾』三一九号、一九〇六年七月一四日)。

- (44) 「大阪教況」(『教海一瀾』三七七号、一九〇七年八月二二日)。
- (45) 「大阪青年会館会館式」(『教海一瀾』三八四号、一九〇七年一〇月二二日)。
- (46) 「仏教会堂建築趣意書」(『建築方法の大要』(『婦人雜誌』第二九号、一九〇六年四月)。
- (47) 「仏教会堂建築補助」(『三寶叢誌』二七三号、一九〇六年一二月)、「仏教会堂建築補助金」(『婦人雜誌』二二八号、一九〇七年一月)。
- (48) 「築地本願寺龍谷会」(『教海一瀾』四一七号、一九〇八年五月三〇日)。
- (49) 「東京仏教会館の開始」(『教海一瀾』四六九号、一九一〇年四月一日)、「明治会館の臨時講演」(『教海一瀾』四七四号、一九一〇年九月一日)、「本派本願寺東京会堂明治会館建築」(『婦人雜誌』三三八号、一九一六年三月)、「明治会館建築に就て」(『教海一瀾』六一七号、一九一七年九月一〇日)。
- (50) 「明治会館再築計画」(『教海一瀾』五三五号、一九一三年四月一日)、前掲「本派本願寺東京会堂明治会館建築」。
- (51) 「豊橋日曜学園」(『龍谷週報』六五号、一九一〇年五月二二日)、「会館の鉄道布教」(『教海一瀾』五一六号、一九一二年一〇月一五日)、「豊橋会館の法要と近状」(『教海一瀾』五三七号、一九一三年五月一日)、「豊橋教院遷仏会」(『教海一瀾』五六五号、一九一三年七月三日)。
- (52) 「新築されたる崇徳会館」(一九一一年一二月二二日付『中外日報』)、熊田重邦『近代真宗の展開と安芸門徒』(広島女子大学、一九八三年)、崇徳学園百二十年史編纂委員会編『崇徳学園百二十年史』(学校法人崇徳学園、一九九五年)。
- (53) 「上宮教会の会堂」(『三寶叢誌』二七七号、一九〇七年四月)、「上宮教会創立当時の事情」(一九一五年七月九日付『中外日報』)、高木武三郎編『上宮教会八十年史』(社会福祉法人上宮教会、一九七七年)、斎藤一暁『河瀬秀治先生伝』(財団法人上宮教会、一九四一年)。
- (55) 「京都最古の婦人会」(一九〇九年六月二〇日付『中外日報』)、「仏教婦人会年鑑」一四七—一四八頁(仏教婦人会連合本部、一九三二年)、『京都婦人慈善教会・京都仏教婦人会・六角仏教会 百年のあゆみ』(宗教法人六角仏教会、一九九三年)。
- (56) 「慈善教会起工式」(『教海一瀾』四七二号、一九一〇年七月一日)、「婦人慈善教会の開館式」(『教海一瀾』四九三号、一九一一年七月一日)。

- (57) 前掲『仏教婦人会年鑑』一四七―一四八頁、前掲『京都婦人慈善教会・京都仏教婦人会・六角仏教会 百年のあゆみ』。
 (58) 「訓示」(『婦人教会雜誌』三三三号、一八九〇年一〇月)、「婦人法話会」(『道之友』八号、一八九〇年一〇月)、「婦人法話会」(『本山報告』六三三号、一八九〇年九月二十五日)。
 (59) 婦人法話会編『五十年史要』八―三八頁(真宗大谷派婦人法話会、一九四一年)。
 (60) 『婦人法話会』(『宗報』一二二号、一九二一年一〇月二五日)、前掲『五十年史要』五四―五七頁。
 (61) 「教界時観」(一九一五年八月二六日付『中外日報』)。
 (62) 「報道一束」(『政教時報』八八号、一九〇二年一〇月一日)、常光浩然『明治の仏教者』下(春秋社、一九六九年)、前掲『明治・大正期東京の青年仏教者―徳風会から東京大学仏教青年会へ―』、岩田文昭『近代仏教と青年―近角常観とその時代』(岩波書店、二〇一四年)。
 (63) 「求道会館設立趣意書」(『政教時報』一〇五号、一九〇三年一〇月二八日)。
 (64) 近角常観「求道会館設の趣旨を披瀝す」(『政教時報』一〇五号、一九〇三年一〇月二八日)。
 (65) 「求道会館建設の相談会及其発表」(『求道』八卷四号、一九一一年九月)。
 (66) 「求道会館落成式報告講演速記」(『求道』一三卷一号、一九一六年一月)。
 (67) 「会館構造概説」(『求道』一二卷三号、一九一五年一〇月)。
 (68) 前掲『上宮教会八十年史』、「中央仏教会館建設事業経過概要」(『中央仏教』五卷二一、一九二二年一月)。
 (69) 「三十万円の記念会堂を建設せんとの準備運動」(一九一五年八月二日付『中外日報』、「中央仏教会館発起人会」(『警世』一三三九号、一九一五年一月)を参照して誤字等を修正した)。
 (70) 前掲『上宮教会八十年史』、前掲『中央仏教会館建設事業経過概要』。
 (71) 前掲『新仏教とは何であったか―近代仏教改革のゆくえ―』第八章。
 (72) 前掲『上宮教会八十年史』、前掲『中央仏教会館建設事業経過概要』、「中央仏教会館工事着手」(一九二〇年三月一八日付『中外日報』)。

(73) 土屋詮教編『昭和五年仏教年鑑』(仏教年鑑社、一九二九年)。

(74) 「本願寺派東京会堂明治治会館新築決定」(『婦人雜誌』三四五号、一九一六年一〇月)、「明治治会館建築に就て」(『婦人雜誌』三四五号、一九一六年一〇月)、「明治治会館建築に就て」(『婦人雜誌』三四五号、一九一六年一〇月)。

- 誌』三五七号、一九一七年一〇月)、「明治会館の開館式」(『婦人雜誌』三六六号、一九一八年七月)。
- (75) 松岡了眼編『築地本願寺社会部事業要覧 大正十四年度』(一九二六年)、梅山英夫編『東京築地本願寺社会部事業要覧 昭和三年九月』(一九二八年)、柘植慈想夫編『東京築地本願寺社会部事業要覧 昭和六年九月』(一九三一年)、千葉乗隆編『新修築地別院史』(本願寺築地別院、一八八五年)。
- (76) 伊東忠太「寺院将来の建築」(一九一三年二月八・二一日付『中外日報』)。
- (77) 四年一月)掲載の「耐火的仏寺建築と鉄筋コンクリート」でも同様の主張をくり返している。
- (78) 「会館時代へ」(一九二三年四月一八日付『中外日報』)。
- (79) 「高倉会館開館式」(『宗報』二四七号、一九二二年五月)。
- (80) 「高倉会館」(『宗報』二四八号、一九二二年六月)。
- (81) 佐々木親善編『旧顕道学校同窓所感集』(顕道会館、一九三三年)、中西直樹『近代西本願寺を支えた在家信者——評伝松田甚左衛門——』(法藏館、二〇一七年)。
- (82) 「顕道会館新築」(『教海一瀾』六七六号、一九二二年一〇月二五日)、佐々木親善編『顕道会館十周年記念』(顕道会館、一九三三年)。
- (83) 前掲『旧顕道学校同窓所感集』。
- (84) 中野楚溪編『仰景帖』(山口家文庫、一九三八年)、株式会社山口玄編・刊『山口玄八十年』(一九六五年)。
- (85) 「山内慶華財団の設立」(『教海一瀾』六八七号、一九二三年九月)、「山内慶華会館落成式」(『教海一瀾』六八九号、一九二三年十一月)、「山内慶華寮開寮式」(『教海一瀾』七三三号、一九二七年九月)。
- (86) 「仁風会館落成式」(『教海一瀾』七〇〇号、一九二四年一月)、「仁風会館の事業」(『深川仏教会館』「教海一瀾」七五四号、一九二九年八月)、前掲『築地本願寺社会部事業要覧 大正十四年度』。
- (87) 大谷派本願寺巻頭復興事務局編『関東大震災と東本願寺』(一九二七年)、曹洞宗務院教学部編『曹洞宗社会事業要覧』(一九二七年)、大森公亮編『浅草寺社会事業年報』昭和三年版(浅草寺社会部、一九二八年)。
- (88) 「東京帝国大仏青会館の開館式と今後の新事業 活躍の新陣容全く成る」(一九二四年一〇月二五日付『中外日報』)、稲葉文海「東京帝国大学仏教青年会の活動」(吉田龍英編『昭和八年仏教年鑑』仏教年鑑社、一九三二年)、「仏陀成道の聖

辰を卜し東京青年教徒の大烽火」（一九二四年二月一〇日付『中外日報』）、「全日本仏教青年会連盟史稿」（『青年仏徒』一卷一・五号、一九三六年七・十一月）、東京大学仏教青年会編・刊『財団法人東京大学仏教青年会創立九十周年記念誌』（二〇一〇年）、一色大悟「東京帝国大学仏教青年会をめぐる雑記―あるいは近代仏教と近代日本の現場」（『仏教文化』六一号、二〇二二年二月）。

(90) 九州大学仏教青年会創立一〇〇周年記念誌編纂委員会編『九州大学仏教青年会創立一〇〇周年記念誌慈悲のこころ 百年』（社団法人九州大学仏教青年会、二〇〇九年）、前掲『仏教と医療・福祉の近代史』第I部第二章。

(91) 『東京心光会館』（『真宗』二八三・二八四号（一九一五年六月）、「東京心光会館」（『真宗』二九二四号（一九一六年二月）、前掲『関東大震災と東本願寺』。

(92) 『石原堅正』（城端町史編纂委員会編『城端町史』国書刊行会、一九八二年）、「仏教青年会館落成記念絵葉書」大谷廟所発行。

(93) 『金沢真宗会館』（『真宗』二九一号、一九一六年一月）。

(94) 『大正会館落成式』（『教海一瀾』七二四号、一九二六年十一月）、開教百年史編纂委員会編『本願寺鹿兒島開教百年史』（浄土真宗本願寺派鹿兒島教務所・鹿兒島別院、一九八七年）。

(95) 『高知別院会館落成式』（『教海一瀾』七三五号、一九二七年二月）、「神戸仏教会館竣工」（『教海一瀾』七三七号、一九二八年一月）、「山口会館落成式」（『教海一瀾』七四一号、一九二八年六月）、「水波仏教会館慶讃美会」（『教海一瀾』七四三号、一九二八年八月）、「熊本会館落成式」（『教海一瀾』七六一号、一九三〇年四月）、「福井仏教会館類焼」（『教海一瀾』八〇五号、一九三四年一月）、「姫路仏教会館新築」（『教海一瀾』七八一号、一九三二年一月）、「別府仏教会館成る」（『教海一瀾』七八四号、一九三二年四月）、「大阪津村別院会館新設第一期工事」（『教海一瀾』七八三三三、一九三二年三月）、「津村別院の洋館落成式」（『教海一瀾』七九〇号、一九三二年一〇月）、「徳島本願寺会館落成」（『教海一瀾』七九五号、一九三三年三月）、「難波別院大谷会館の落成」（『真宗』三七九号、一九三三年五月）。

(96) 横井淳道編『浄土宗社会事業一覽 昭和十四年九月』（浄土宗事務所社会課、一九三九年）、「仏光寺婦人会館新築記念」一九三〇年、時宗教務院社会課編・刊『昭和九年三月末現在 時宗社会事業要覧』。

(97) 「大阪に初めての仏教会館 宗教講堂春風壯落成」（一九二六年二月七日付『中外日報』）、「ブルジョアの道楽としての

仏教会館建設」(一九二八年八月五日付『中外日報』、永田駒三郎編『聖徳太子』(春風荘、一九三五年)。

(98) 「仏教奉仕会」(『六大新報』八八九号、一九二〇年十一月)、「建設を急ぐ奉仕会の大阪仏教会館」(一九二六年五月四日付『中外日報』、長島修「明治期鉄鋼問屋の成立と展開―大阪鉄商津田勝五郎商店の成立と展開―」(『経営史学』三二巻二号、一九九七年)。

(99) 前掲「染香人(伊藤長堂翁追慕録」所収「略歴」、丸紅株式会社社史編纂室編『丸紅前史』六九―七〇頁(丸紅、一九七七年)。

(100) 山西喜一郎編『芦屋仏教会館と其使命』(芦屋仏教会館、一九二七年)。

(101) 「城南仏教会館敷地寄付」(『教海一瀾』七二〇号、一九二五年九月)、「会館の寄付」(『教海一瀾』七二三号、一九二六年一〇月)、「直江氏へ褒章」(『教海一瀾』七二四号、一九三二年一月)、「福岡同朋会館開館式」(『真宗』二八七号、一九二五年九月)、「重信会館入仏式」(『真宗』三四五号、一九三〇年七月)。

(102) 前掲「ブルジョアの道楽としての仏教会館建設」。また、一九二六年二月七日付『中外日報』掲載の「或る計画 某仏教会館へ」では、「官憲に阿り富豪に媚びるの為か思想団体或は労働団体には曖昧なる口実を設けてこれが貸与を拒絶せる」某仏教会館の姿勢を厳しく糾弾している。

(付記) 本論の執筆にあたって、次の機関とそのご関係の方々より、貴重な写真・資料などをご提供いただいた。記してお礼を申し上げます。

通川山蓮窓寺様(東京都台東区) 学校法人崇徳学園様 宗教法人六角仏教会・六角会館様

一般財団法人東京大学仏教青年会様 一般社団法人九州大学仏教青年会様

本願寺派鹿兒島別院様 公益財団法人芦屋仏教会館様

キーワード 日本仏教、近代仏教史、仏教会堂、仏教会館、寺院開放